
東方幻想郷録

Razgriz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想郷録

【Nコード】

N2131BA

【作者名】

R a z g r i z

【あらすじ】

昔から曰くつきに好かれたり妖怪と遊んでいた何故かテロリストとガチンコ勝負をしたり、そのテロリストを潰すために百鬼夜行をおこしたりと弾けた主人公が幻想入りします。

体は人外、心は人間。

そんなお話です。

山無し谷無し落ちもなし。

0 話（前書き）

主人公設定

0 話

名前

久我 裕也

くが ゆうや

性格

人畜無害（自称）

甘党（他称）

家庭的（自称）

プロフィール

昔から妖怪や幽霊が見えていた。

その妖怪や幽霊は裕也を喰らおうと襲っていたのだが、本人はそれを遊びと勘違いしていた。

鬼との勝負に勝ったことがあり、その報酬として妖刀、空割を得た。その勝負の内容とは、ジャンケン。

鬼は当時子供であった裕也を喰らうために勝負を持ちかけ、ハンデとして勝負の内容を裕也に決めさせた結果であった。

グアムへ修学旅行へ行った際、自由行動で単独で観光をしていた時にテロに遭遇。

全力で逃げ出しているときに、観光でなぜかグアムにいた鬼と再開。そのまま鬼が能力を使用し、百鬼夜行を成し、テロリストを壊滅させた。

能力

曰くつきに好かれる程度の能力

風を司る程度の能力

あらゆるものを爆発物へ変える程度の能力

武器

主に空割と爆発物。

0 話（後書き）

こんな感じ？

1話（前書き）

まだ幻想入りはしない。

1話

青い空、白い雲。

本日は快晴なり。

熱くもなく、涼しくもないそんな心地の良い昼下がり。

今日は過ごしやすいか？と100人に聞いたら70人くらいは過ごしやすいと答えるのではなからうか。

そんな晴れ渡る空の下、全力疾走する少年の姿があった。

この小説の主人公である。

名を久我裕也といい、この街の有名人だ。

なぜ有名か、というのは機会があれば語るとしよう。

裕也が疾走する理由はいくつかある。

テストが終わり、午前放課だったために散歩と称してお気に入りの昼寝ポイントへ向かったら、黒服サングラスのお兄さん方が大金と白い粉を取引していたこと。

それを目撃したことがばれて、鉛が飛び出る危なっかしい飛び道具をぶっ放されたからだ。

つまるところ、命を狙われている。

黒服（以下黒）達は銃にサプレッサーと呼ばれる消音器を装着し、先ほどから50を超える弾丸を裕也に向かって発砲していた。

すごい勢いで看板とか鉢植えとかガラスとか割れているけれど、そんなものどこ吹く風、裕也は周りの被害など考えずに街の中心へ突っ走っていった。

「ぬあああああああああああああ！！！！」

昼寝ポイントは街のはずれにあるため、森を通らなければならない。だが、問題がひとつある。

この山には土地神が居り、とある神社を守護している。その神社とは、博麗神社。

一見廃れた神社なのだが、流れの妖怪に聞いたところ、現世と幻想の境界に建てられている神社なのだそうだ。

その神社の近くを通ると、なんというか、吸い込まれるような感じがし、正直怖い。だが、そんなことも言っていられない。

土地神に助けを求めよう。

そう決めて正規の道ではなく、博麗神社へと続く獣道へと進路を変えた。

しばらく走ると発砲音が消え、完全に黒を撒いたようだった。

この森は昔から駆け回っていたため、庭のようなものだ。

「ハクタクううううう！いるかあああああああ！」

博麗神社に到着し、土地神の名を呼んだ。

ハクタク。

それがこの神社の土地神だ。

本人は土地神ではないと断言するが、どうでもいい。

『騒がしいぞ、人の子よ。ここには来るなといっただろう』

重く、しずかな声。

廃れた神社から姿を現したのは人面牛身。顎髭を蓄え、目が顔に3つ、胴体に6つ。角が額に2本、胴体に4本ある妖怪。

十年ほど前に知り合った妖怪だ。

1 話（後書き）

みじかくね・・・？

2話（前書き）

胡散臭い人登場

2話

ハクタクとは十年前に知り合い、助けてもらった。

経緯はどうあれ、今では一番付き合いの長い妖怪ではないだろうか。

『人の子よ、ここはお前が来て良い場所ではない。妖怪には…』

「はいはい。妖怪には妖怪の世界が、人間には人間の世界がある。それは相容れぬもので、故にお前はここに来てはいけない。だろ？耳にタコができるほど聞かされたよ」

ハクタクはため息をつくとき、縁側にその身を伏せた。
その背を裕也が撫でる。

『お前を追っていた悪意のある人の子。今しがた妖怪に食われたぞ』

「気づいてたなら助けてくれればいいのに」

ある意味喜ばしい報告をしてくれたハクタクだが、つまり、それは裕也が追われていたことを知りながら助けてくれなかったということになる。

それに対し、裕也は少し顔をしかめた。

暫く沈黙が続いたが、ハクタクを撫でる手は止めない。

この森には様々な妖怪がいる。

ハクタクと互角に殺りあう者もいれば、人に友好的なもの、人を拒絶する者、人を喰らう者。
そんな妖怪がいるのだ。

ふと、ハクタクが思い出したかのように口を開いた。

『今日は客人が来る。とても偉い御方だ。もう帰れ、ここにいると邪魔になる』

「妖怪？」

『うむ。境界を操り、現世と幻想を切り離れた妖怪。名を八雲紫と言ってな、賢者と呼ばれている』

「そっか。ハクタクが邪魔だっていうなら帰るよ。またな、ハクタク」

そう言つて、廃れた神社を後にしようとした瞬間

「御待ちなさいな」

ハクタクとは明らかに違う、鈴の音のような女性の声が聞こえた。

『八雲様……』

振り返れば、紫色のドレスに、日傘をさした金髪の女性が博麗神社の屋根に腰かけていた。

2話（後書き）

胡散臭い人の登場は今回これだけ。

3話（前書き）

バb…ゴパアッ!?

3話

ハクタクが八雲紫に対し、首を垂れる。

八雲紫は屋根からふわりと降りると、そのハクタクの頭を撫でた。

「初めまして、久我裕也。私は八雲紫。紫でいいわ。スキマ妖怪よ」

突然の自己紹介。

「というか何故自分の名を知っているのだろうか？と、首をかしげる。裕也は自分の記憶を遡るが、いくら思い出そうとしても自分の記憶にこんな妖艶で胡散臭い女性はいない。」

「俺は久我裕也。よく変わり者って言われるけど、人間だ。何故俺の名を？」

そう問いかけると紫はハクタクを撫でつつしずかに答えた。

「彼から聞いていたのよ。貴方のこと、貴方を取り巻く環境を」

「どうやら、ハクタクから裕也のことを聞いていたようだ。」

ハクタクと古い友人関係を持っているのなら、酒の肴か何かで自分のことを彼女に話していても納得できる。

そのまま紫は続ける。

「鬼との勝負、百鬼夜行、妖怪との遊び。とても面白い人生ね？」

「否定はしない。スリルがあって飽きないよ。でも、命がけの遊びは少し勘弁してもらいたいよ」

事あるごとに、河童と天狗との上下関係の抗争や、鬼のケンカ、拳句には何故か現代に甦った八岐大蛇を倒すために妖怪を率いてドンパチをやらかしたこともある。

そのせいで、八岐大蛇を倒した人間という恐ろしい勘違いが発生し、日本どころか世界各地の妖怪、化者が裕也に勝負を挑んできたりと大変な思いをしたことがある。

どうにかしてくれと天ちゃん（天照大神）に泣いて頼んだところ、快く勝負を挑んできた者を制圧してくれた。

「本当に面白いわね。貴方、幻想郷に興味はない？」

扇子で口元を隠しながら真っ直ぐに裕也を見据えた目は、妖しく輝いていた。

3 話（後書き）

何してんだ俺：

4話（前書き）

夏目友人帳って面白いよね（え

4 話

幻想郷？

桃源郷や理想郷ではなく？

まあ、そんなことはどうでもいい。

それよりも重要なことは、そこはかたなく面倒事の予感しかないことだ。

この少年は長年厄介事に巻き込まれる傾向にあるので、そういった”厄介事、面倒事”に対する第六感というべきものが優れている。

そしてその第六感が今までで最大級の警笛を鳴らしているのだ。

間違いない。

今ここで幻想郷とやらの興味があると答えてしまえば、間違いない巻き込まれる。

それだけは避けたい。

「幻想郷？あんまり興味ないなあ。それに、興味があるとしたら、どうするのさ」

興味がない、と断言し、それとなく肯定した場合の行動を聞いてみる。

すると紫は胡散臭い笑みを浮かべ一言。

「落としていたわね」

わけがわからないよ。

そんな裕也の表情を読み取ったのか、紫はクスリと笑った。

「私がスキマ妖怪と呼ばれる所以は、『境界を操る程度の能力』にあるの。空間の境界を操って、貴方を幻想郷へスキマ送りにしようかと思っていたのだけれど…。残念ね」

程度、ってなんだっけ？

腕を組んで考え始める裕也を余所に、紫はハクタクと会話を始めた。

「それで？こつち側から見た結界はどう？」

『最近、内側から何らかの影響を受けて何度も薄れ、歪み、裂けている。そして、そのせいで既に14もの妖怪が幻想へと流れた。何か大きな天災でも？』

「やつぱり…。天災ではないけれど、ここ最近になって異変を起す馬鹿が増えてきたのよ。きつとそれが結界に影響を与えているのね。はあ、霊夢がしっかりしてくればあの程度の異変で『博麗大結界』が異常をきたすなんてありえないのだけれど…」

紫とハクタクがあーだこーだと議論を交わしている。

美少女と人の顔を持つハクタクが言い合っている姿はシュールだな
！。

瞬間

。

ゾクッ

「ッ！」

殺気が、溢れた。

4 話（後書き）

T h e 急展開

俺はどこへ向かうのでしょうか

5 話（前書き）

夢も希望も、神も仏もありやしねえ
…

5話

ハクタクは姿勢を低くし身構え、八雲紫はあくまで自然体を貫いた。いや、その殺気程度では動じなかった。

裕也はというと…

「またおまえか」

目の前に現れたのは熊。

のような妖怪で、名前は知らない。

特徴をあげるとすれば、高さ6mの横が3mほど、目は三つあり血走っている。

腕は右腕しかなく、左の腕は鋭利な物によって切り落とされたようだ。

しかし、片腕といえどその腕は丸太のように太く、鋭く細長い爪が3本生えている。

裕也はこの妖怪にこの一週間で既に3回襲われており、今回を含めれば4回目になる。

実はこの妖怪、つい9日ほど前にこの森に流れてきた妖怪で、そのままいついたというわけである。

『人の子よ。お前はアレに何をしたのだ？お前だけを狙っているように見えるが…』

そうなのだ。

この妖怪は今、裕也を血走った眼で睨みつけ、いつでも飛びかけられるように姿勢を低くしている。

「いやあ、俺が弱そうだからじゃないかな？ハクタクは一応土地神だし『違つ』…。そっちの八雲さんとやらは雰囲気的にヤヴァそうだし」

なんでだろうな…。と気の抜けた会話をし、ふと思い出したかのように手を打った。

「そうだ、こいつの腕を空割で叩き斬ったんだ！そうだそうだ、思い出したぞ！居合いの真似事してたらいきなり襲ってきて、斬ったんだ！わかったぞこいつが俺を狙う理由！」

ひゃっほう！と何故か喜ぶ裕也に、妖怪が飛びかかる。

「速さが足りない！」

そう叫んだ裕也は、地面を転がるように回避し、ハクタクの横へと移動した。

『相手をせぬのか？』

「空割ないし。めんどくさいし。怖いし。空割あつてパフェ奢ってくれるなら頑張る」

ハクタクを盾にするように後ろに隠れ、やだやだと首を振る裕也。

「じゃあ、はい。空割。パフェは後で５杯奢ってあげるわ」

紫色の裂け目から、愛刀である空割を取りだし裕也に渡す紫。

.....。

「嘘だと言ってよバーニィ」

「ところがどっこいこれが現実」

空割を受け取り、虚ろな目をしてハクタクの前に出る。

男に二言は無い。

仕方がないから...。

「パフェの為だ...。死んでくれ」

取り敢えずパフェのせいに見てみた。

5 話（後書き）

文才ください

6話（前書き）

せんとうじーんってどうやってかくのー？

6話

空割を抜く。

鬼から貰ったその刀は、刀身をよく見ると少し青く見える。

その鬼は言っていた。

鬼の打った刀は、折れない曲がらない刃こぼれしない。

なんたって鬼が使うんだ。

只の刀じゃ役不足さ。

自慢げに言っていた。

右手に刀を。

左手に鞘を。

鉄で作られた鞘は盾にもなるし、打撃にも使える。

非常に使い勝手がいいものだ。

腰を落とし、溜める。

息を吸い。

「

!!」

ッ!

飛びだした。

（中々速いわね…。）

妖怪は太いその腕を振るうが、当たらない。

正確には

当てられない。

裕也は常に妖怪の死角となる場所へと移動を続け、相手はその動きに翻弄され、一瞬動きを止める。

それは裕也を探すためのものだったのか、ただ単に大ぶりの攻撃が祟ってバランスを崩したのか。

ただ一瞬。

それだけで十分だった。

チャンスと見た裕也は瞬時に死角から飛び出し、土を握りしめ。

「喰らえ！」

熊の3つの目に投げつけた

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

眼を抑える熊。

「そおい！」

追い打ちをかけるように片足へ体全身を使って空割を突き刺す！

「からのッ！」

そのまま斬り払う！

完全に体勢を崩し、片膝をつく態。

そして。

「刀鬼流奥義ッ！いっとりようだあああああああああああああああああああああ
ああああああああん！！！」

奥義もクソもない。

只の力技。

圧倒的な強度と切れ味を誇る鬼の刀だからこそ成せる技。

その技は妖怪を頭から真つ二つにし、完全に沈黙させた。

「どやっ」

キリリッと決め顔の裕也に紫が一言。

「グダグダね」

私に戦闘シーンは無理かもしれない。

6話（後書き）

ほのぼのめろろろろろろろろろ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2131ba/>

東方幻想郷録

2012年1月14日18時51分発行